

# 日本緩和医療学会

## ニュースレター

No.112  
◆◆◆  
Aug.2026



特定非営利活動法人  
日本緩和医療学会  
Japanese Society for Palliative Medicine

〒550-0001 大阪市西区土佐堀1丁目4-8 日栄ビル603B号室  
E-mail: info@jspm.ne.jp URL: https://www.jspm.ne.jp/

### 主な内容

|               |    |
|---------------|----|
| 巻頭言 .....     | 10 |
| 理事就任挨拶 .....  | 11 |
| よもやま話 .....   | 21 |
| 委員会活動報告 ..... | 22 |

### 巻頭言

## 緩和医療の未来へ向けて

聖マリアンナ医科大学 緩和医療学講座  
橋口 さおり



このたび理事長を拝命いたしました、聖マリアンナ医科大学緩和医療学講座の橋口さおりです。私が緩和医療に関わり始めたのは1997年頃です。当時、鎮痛薬すら十分ではない中で、なんとか痛みを和らげる方法はないものかと院内の勉強会に参加し始めました。やがて会の運営を手伝い始め、実践のために始まった緩和ケアカンファレンスに加わるようになりました。緩和医療がカバーする領域は想像以上に広がったのですが、専門的に勉強する機会が少なかったことから、この学会に参加するようになりました。学術大会はとても楽しみでしたし、会員が様々な課題の解決に努力されている様子は私にとっても励みになりました。ここ数年はがん以外の疾患に対する緩和医療も注目されてきていますが、これまで培っていたものをベースに、疾患にかかわらず緩和医療を提供することができるよう、取り組む必要を感じています。

一方で、基本的緩和医療についての教育も重要です。大学医学部で教職に就いていますが、現状では、多くの大学で緩和医療についての教育が十分に行われているとはいえ、6年間でたった数コマというところも少なくありません。医学を学ぶ中で、緩和医療がどの疾患にも必要であることを早期から教育できるように、卒前教育の推奨カリキュラムや初学者用の教科書の編纂などが必要なのではないかと考えています。教育は時間がかかりますし、成果は見えにくいものですが、緩和医療の発展には欠かすことができないものだと考えています。

もうひとつ課題と考えているのが、多様な人材の登用です。当会の強みは、多職種かつ多彩なバックグラウンドを持つ人材で構成されていることです。さらなる発展のためには、多様な人材が活躍できるように、人が循環する仕組みづくりが必要です。

今回の就任にあたって、学生時代からの親友に「早く行きたければ一人で行け、遠くへ行きたければみんなで行け」という言葉をもらいました。上記以外にも多くの課題がありますが、緩和医療の未来へ向けて、皆様とともに一歩ずつ進んでいきたいと思えます。よろしくお願いいたします。

## 理事就任挨拶

### 理事就任のご挨拶



大阪大学大学院  
医学系研究科  
荒尾 晴恵

このたび、理事に当選させていただきましたこと、ご支援いただきました皆様に心より感謝申し上げます。看護系理事として、緩和医療とケアの発展のため

に尽力してまいりたいと思っています。

先日、公益社団法人日本看護協会の令和8年度通常総会に出席する機会がありました。そこで、「看護の将来ビジョン 2040～いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護～」が改めて紹介され、看護が進むべき方向性、果たすべき役割について説明がありました。

社会の変化は著しく、看護を取り巻く大きな環境の変化に対応していけるように、看護職が目指すものとして、①その人らしさを尊重する生涯を通じた支援、②専門職としての自律した判断と実践、③キーパーソンとしての多職種との協働が示されていました。また、あるべき看護の実現に向けた戦略として、①質の高い看護実践のための教育制度改革の実現、②より高い自律性を持った専門職としての活躍、③地域における看護の拠点の確保が示されていました。

「看護の将来ビジョン 2040」は看護職全体に向けたものであり、ここで述べられている社会の変化は、緩和ケアの実践にも当てはまるものです。日本緩和医療学会においても、変化する社会に対応できる緩和ケア、看護のあり方を検討することが必要であると感じました。理事在任中に当学会に所属されている緩和ケア領域の看護の専門家といわれるがん看護専門看護師、緩和ケアやがん疼痛看護等の認定看護師の皆様、そして病院や施設の看護管理者の皆様とディスカッションができる機会があればよいと思っています。緩和ケアを必要とする人に届けるには、どのようなケアの仕組みが必要なのか、その仕組みの中で看護職にどのような能力が求められているのか、当会は何ができるのかなどを共に考えていけたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

### 理事就任のご挨拶



帝京大学医学部  
緩和医療学講座 主任教授  
有賀 悦子

このたびは、会員の皆様より多大なるご支援を賜り、誠にありがとうございました。皆様からお寄せいただいたご期待にしっかりと応えできるよう、精

いっぱい努めてまいります。

これまで私は、専門医制度、広報、渉外、将来構想、地区委員会など、学会のさまざまな活動に関わってまいりました。今期も引き続き地区委員会を担当いたします。地区委員会は、全国7支部を取りまとめ、支部大会の開催を支援する委員会です。各支部が地域の特色を生かしながら、会員相互の交流と学びを深める場を継続していくことは、当会にとって極めて重要な基盤であると考えています。

一方で、当会の会員構成は40～50代にピークがあり、20代の会員は全体のわずか1%台にとどまっています。今後、会員の高齢化がさらに進むことも予測されるなか、支部大会を円滑に開催するだけでなく、若い世代を含めた多様な会員が学会活動に参加しやすい環境を整え、当会全体の機能維持と発展につなげていくことが求められています。今期はその視点をより明確に持ち、委員会活動を充実させてまいります。

私にとって、今期は年齢的に最後の任期となります。私は腎外科で卒後研修を受け、透析や移植の医療を通して多くを考え、緩和医療の道に進みました。40年近く前に医療現場で目の当たりにした課題が、いま改めて医療課題として表面化し、制度化されつつあります。これまで医師として積み重ねてきた経験に加え、他学会の役員や国の審議会委員などの機会を通じて得た学びと人のつながりを、当会に少しでも還元したいと考えております。

会員の皆様とともに、より洗練され、持続可能な学会運営に貢献できるよう、微力ながら力を尽くしてまいります。2年間、どうぞよろしくお願いいたします。

## 理事就任のご挨拶



東京女子医科大学附属  
足立医療センター  
がん包括診療部緩和ケア室副長  
緩和医療暫定指導薬剤師  
同薬剤部薬剤部長  
伊東 俊雅

このたび、日本緩和医療学会の理事に就任いたしました、東京女子医科大学附属足立医療センター薬剤部長の伊東 俊雅でございます。本会において薬剤師の理事は私で2人目となり、その責務の重さと思うとともに、身の引き締まる思いでございます。ご推薦くださった先生方、ならびに会員の皆様に、心より御礼申し上げます。

わが国の緩和医療は、超高齢社会の進展のなかでその重要性を一層増しております。緩和ケアの対象は、がん患者さんのみならず、心不全をはじめとする非がん疾患の患者さんにも広がりを見せております。患者さんが入院・外来・在宅と療養の場を移されても、シームレスな薬物療法の継続が途切れることのないよう、施設および職種の垣根を越えた連携を支えることが、薬剤師に求められていると思います。薬剤師は、看護師の観察と医師の判断をつなぐ結節点として、薬物療法の最適化に貢献できる職種であると考えております。

私はこれまで、緩和医療における薬剤師の役割拡大に向けた取り組みを行ってまいりました。とりわけ、緩和領域で頻用されながら保険適用の範囲が課題となる薬剤の適用外使用の問題解決に向け、診療報酬改定への対応や制度設計の議論に取り組んでおります。こうした課題は、学会として継続して向き合っていくべきものと思います。理事としては、本会と日本緩和医療薬学会との連携を深めるために、職種の垣根を越えた協働を一層進めてまいりたいと考えております。

会員の皆様には、忌憚のないご意見をどうぞお寄せください。先生方のご講演やご議論から多くを学ばせていただくことを、心から楽しみにしております。薬剤師の視点が本会のさらなる発展のために一助となるよう、微力ながら力を尽くしてまいります。患者さんご家族のために、よりよい緩和医療を実現できるよう努めていきたいと存じます。何卒ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

## 地方の声を繋ぎ、全ての「生命を脅かす病」を対象とする緩和ケアへ



国家公務員共済組合連合会  
斗南病院  
精神科・緩和ケア内科  
上村 恵一

会員の皆様、こんにちは。

この度、日本緩和医療学会の理事に就任いたしました 斗南病院 上村 恵一です。当院は札幌市にある 300 床の地域がん診療連携拠点病院です。今回の再任に身の引き締まる思いとともに、本学会のさらなる発展に向けて全力を尽くす所存です。

今回の役員選出において、私は大きな責任を痛感しております。新たに選任された 30 名の理事の中で、私は本州以外から選出された唯一の理事となります。現在、四国や九州、さらには本州内においても東北や中国地方に理事が不在という現状があります。医療資源やケアの体制に地域格差が生じてはなりません。私は地方都市に身を置く唯一の理事として、地域の臨床現場が直面している生の声や課題をすくい上げ、学会の意思決定に反映させる「地方の代表」としての役割を果たしてまいります。

また、私のもう一つの専門軸である精神腫瘍学（サイコオンコロジー）の領域からも、理事が少ない状況です。身体的苦痛のみならず、患者様やご家族が抱える精神心理的な苦痛、そしてスピリチュアルな課題に対して、学際的な視点から確実な発信を続けていく代表としての責任も全ういたします。

現在、我が国の緩和ケアはがん領域にとどまらず、心不全や腎不全、呼吸不全をはじめとする臓器別疾患、すなわち「非がん領域」へと急速に広がりを見せています。これを受け、今期の私の最も重要な使命は、国際的な緩和ケアの定義や世界の潮流に合致した、日本における「生命を脅かす重い病（Serious Illness）」の明確な定義を確立することです。

誰もがどこに住んでいても、どのような病であっても、尊厳を持って最期まで自分らしく生きられる社会の実現を目指します。会員の皆様の実践を支え、共に歩む学会であるよう尽力いたしますので、どうぞ温かいご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

## 理事就任のご挨拶



京都市立病院  
緩和ケア科  
大西 佳子

この度、代議員および理事選挙において、会員の皆様から温かいご支援をいただき、初めて理事に就任いたしましたこと、心より御礼申し上げます。

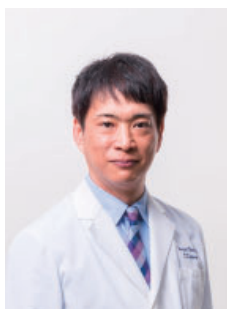
私はこれまで、ペインクリニック・緩和ケアの臨床に携わりながら、地域とのつながりやコミュニティを含めた医療のあり方が大切であることも実感してまいりました。患者さんやご家族のそばに寄り添い続ける中で気づかされてきたのは、緩和ケアが専門施設の中にとどまるかぎり、その恩恵は一部の方にしか届かないという現実です。誰もが思いやりに包まれた最期の時を迎えられる社会の実現には、地域と医療が一体となった持続可能な仕組みが不可欠であると考えています。

学会活動としては、2016年8月より日本緩和医療学会専門医認定・育成委員会の委員を務めさせていただき、現在に至るまで専門医関連業務に携わってまいりました。この経験を通じて、専門医資格の取得はあくまで入り口であり、その後の継続的な教育こそが緩和ケアの質を左右すると確信するに至りました。

今期は専門医育成・教育委員会の委員長を拝命いたしました。本委員会ではいくつかの業務を担いますが、なかでもFD（ファカルティ・ディベロップメント：指導者自身の指導力を高めるための取り組み）については、システムが本格的に動き始める重要な時期を迎えます。副委員長とともに緊密に連携しながら、指導者の育成と専門医の質向上に着実に取り組んでまいります。

若輩ゆえ至らぬ点多々あるかと存じますが、会員の皆様との対話を大切にしながら、学会の発展と緩和ケアが息づく社会の実現に向けて誠心誠意励んでまいります。ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 理事就任のご挨拶



富山大学附属病院  
臨床腫瘍部  
梶浦 新也

この度は理事に再選いただきまして誠にありがとうございます。腫瘍内科・緩和ケア内科という診療科に勤務し、緩和医療専門医として緩和ケア活動に関わ

と共に、がん薬物療法専門医として消化器がんを主体とした化学療法の主治医や、がんゲノム医療にも関わっています。がんゲノム外来と、緩和ケア外来を受診する方は重なる側面もあり、我々の診療科名の通り、緩和医療とがんゲノム医療の融合ということを模索したいです。同時に、治療の現場でおこる患者やスタッフの苦悩を緩和医療学会へフィードバックできればと考えています。チーム医療の充実がその解決策として求められていると考え、チーム医療を普及させる院内活動をしており、その活動を学会へと拡張していければと考えております。

1期目は安全・感染委員として、小林がん学術振興会の助成金で、オピオイド注射薬の希釈方法の統一化にむけて地域調査研究を行いました。今期も安全・感染副委員長として、同研究としてWebコンテンツ作成や全国調査を行いたいと考えており、その際にご協力をお願いします。今期は医療DX推進副委員長も拝命し、医療DXの推進に努めていきたいと考えています。問診ツールのアプリ化や、生成AIで患者の気持ちを支える検討や、さらにそれを発展させて、緩和医療に関わるスタッフのバーンアウト予防に利用できないか、などを模索したいと考えています。

他学会の仕事ですが、日本臨床腫瘍学会の医師事務局員として、がん薬物療法専門医の必要性を可視化するために、化学療法版のNational Cancer Databaseを構築する活動にも関わらせていただきます。専門医の必要性を可視化し、専門医の充足を図る必要があるのは日本緩和医療学会も共通の課題であると考え、学会の枠を超えてがんの診療に関わる専門医の有用性を可視化するような取り組みを行っていきたくと考えております。

今期もよろしくお願いいたします。

## 理事就任のご挨拶



慶應義塾大学病院  
薬剤部  
緩和ケアセンター専任薬剤師  
金子 健

慶應義塾大学病院 薬剤部 緩和ケアセンター専任薬剤師の金子 健と申します。このたび、日本緩和医療学会の理事に就任さ

せていただくこととなりました。大変光栄に存じますとともに、その責任の重さに身の引き締まる思いでおります。

私は1989年に慶應義塾大学病院薬剤部に入職し、2010年より緩和ケアチーム専任薬剤師、2014年より緩和ケアセンター専任薬剤師として緩和医療に携わってまいりました。これまで、薬薬連携をテーマとした緩和ケア研修会の継続開催、東京都区東北部のがん薬物療法研究会の立ち上げ、地域における連携基盤の構築に取り組んでまいりました。また、東京都病院薬剤師会での研修プログラム運営を通じ、280名以上の修了者を輩出しました。

本学会が掲げる「いつでも、どこでも質の高い緩和ケアを」という理念に、私は深く共感しております。緩和医療の現場では、各医療職がそれぞれの視点を持ち寄り、患者さんご家族にとって最善の支援を考え続けています。薬剤師もその一員として、薬物療法の安全性・有効性を支えるだけでなく、患者さんの価値観や生活背景を踏まえた意思決定支援、地域連携、教育・研究活動に、より積極的に参画していくことが重要であると考えています。

今後は理事として、薬剤師が主体的に参画したくなる魅力ある学会づくりや教育環境の整備はもちろんのこと、職種を問わずすべての医療従事者がともに学び合える環境の構築に尽力してまいります。これまでの活動で得た知見を活かし、地域を越えて研修・研究会の輪を広げ、緩和ケアの質向上に寄与したいと考えております。

患者さんご家族の信頼に応える「顔の見える関係」を地域全体に広げ、必要としているすべての方が安心して緩和ケアを受けられる社会の実現に向けて、全力で取り組む所存でございます。皆様のご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

## 理事就任のご挨拶



兵庫県立はりま姫路  
総合医療センター  
緩和ケア内科  
坂下 明大

このたび、2026年度理事選挙を経て、初めて理事に就任いたしました兵庫県立はりま姫路総合医療センターの坂下明大でござ

います。また、同時に専門医認定委員会委員長という重責を拝命いたしました。初めての理事就任にあたり、その職責の重さに身の引き締まる思いでございます。

私は2012年に緩和医療専門医を取得して以来、本学会の代議員として、また専門医認定委員会および専門的・横断的緩和ケア推進委員会の副委員長として活動を行ってまいりました。これまで、専門医制度の整備や育成、さらには緩和ケアチームの基準策定や登録制度の構築など、専門的緩和ケアの基盤作りに微力ながら携わってきた次第です。

現在、わが国の緩和ケアは、がん診療のみならず、心不全、呼吸不全や腎不全といったがん以外の疾患への展開が強く求められております。私自身、臨床現場においては疾患を限定せず、救急やICUからの移行を含めた幅広い緩和ケアの実践と、緩和ケアセンターの運営に取り組んでおります。このような状況で、専門医認定委員会委員長として与えられた私の使命は、専門的緩和ケアの質を担保し、次代を担う専門家を適切に認定・育成することにあります。専門医制度のさらなる充実を図るとともに、緩和医療専門医の認定および育成事業に邁進し、専門的緩和ケアの質の評価と向上に向けた体制整備を推進してまいります。また、多職種からなる本学会の強みを活かし、緩和ケアチーム活動の質の向上と、チームで活動する会員の皆様への支援にも引き続き尽力してまいります。

最後に、国民の健康とQOLの維持・向上のために、関連学会や団体とも緊密に連携し、当学会が社会において果たすべき役割を全うできるよう誠心誠意努めてまいります。会員の皆様におかれましては、今後とも温かいご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

## 理事就任のご挨拶



国立がん研究センター中央病院  
緩和医療科  
里見 絵理子

処暑の候、会員の皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。平素より本学会の活動に多大なるご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

この度の理事選挙におきましてご信任を賜り、3期目の理事、ならびに今期より新たに副事務局長を務めることとなりました。学会運営の中枢を担う重責を自覚し、本学会のさらなる発展に尽力いたします。

前期は将来構想委員会の委員長として、本学会の中長期的な在り方を抜本的に見つめ直し、急速に変化する社会情勢と医療環境に対応しうる機動的な組織体制の構築に着手いたしました。具体的には、緩和ケアの均てん化と制度的基盤の強化に向けた厚生労働省への人事交流、多様な背景を持つ会員が最大限に能力を発揮できる環境を整備するダイバーシティ推進部会の設立、そして次世代の医療提供体制に不可欠な医療DXや会員のインタレストを支え学術活動を進めるSIGの設置など、多岐にわたる課題に取り組んでまいりました。

今期は、副事務局長としての実務を通じた円滑な学会運営はもちろんのこと、引き続き将来構想委員長として、これらの構想を実社会の医療システムへと確実に実装していくフェーズと位置付けています。その中核となるのが、学会活動への「患者・市民参画（PPI：Patient and Public Involvement）」の本格的な検討です。単に当事者の声に耳を傾けるという姿勢にとどまらず、患者や市民の視点を学会の各事業に反映させる仕組みを構築し、社会と協働する学会を目指せたらと思います。

日本の緩和ケアが直面する課題は複雑化していますが、私たちの使命はSerious Illnessを抱えるすべての患者さんご家族の苦痛に寄り添い、いかなる環境下でも最善のケアを届けることです。患者さんご家族のため、そして日々の臨床や研究に邁進される会員の皆様のために、努力していく所存です。今後とも、変わらぬご指導とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

## 理事就任のご挨拶



愛知県がんセンター  
緩和ケア部  
下山 理史

この度、代議員選挙ならびに理事選挙におきまして、皆さまより温かいご支援を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。お寄せいただいたこえを真摯に

受け止め、緩和ケアが一人でも多くの患者さんやご家族に届くよう、誠心誠意努めてまいります。

日本の緩和ケアは主にがん医療を中心として発展してきました。しかし近年では、さまざまな疾患・病態において緩和ケアの必要性が広く認識されるようになっていきます。もちろん、それぞれの疾患には固有の症状、経過、療養上の課題があります。一方で、緩和ケアが大切にしてきたもの—その人の苦しみに耳を傾け、その人らしい生を支え、患者さんご家族の希望を支える姿勢—は、変わることはありません。緩和ケアの根底にある姿勢・態度が、これまで以上に広く、深く、手厚く届けられるならば、患者さんご家族のQOLは必ず向上していくものと信じています。

そのために日本緩和医療学会が取り組むべき大きな使命は二つあると考えています。一つは、すべての医療・福祉従事者が基本的緩和ケアを学び、日々の実践のなかでいつでもどこでも提供できるようにすることです。もう一つは、専門的緩和ケアの質をさらに高め、複雑で困難な苦痛に対しても応え続けられる学術研究と実践を追求していくことです。

私が担当する委託事業委員会では、すべての医療・福祉従事者が基本的緩和ケアを学び、それぞれの現場で手厚いケアを提供できるよう、学びの場づくりに取り組んでまいります。そして、この度新たに拝命いたしました副理事長としては、理事長をお支えしながら、基本的緩和ケアの普及と専門的緩和ケアの深化を、ともに大切にし、学会全体としてより力強く前へ進めていくことが責務であると考えています。その実現のために、患者さんご家族のこえ、会員の皆さま、そして事務局の皆さまのこえを、これまで以上に丁寧に聴いてまいります。それぞれの現場にある悩みや工夫、地域や職種を越えた課題、そして一人ひとりが大切にしている希望を支え、それらをつなぎ、次へと結びつけていきたいと思っています。

この二年間で、ひとりでも多くの方に緩和ケアが届き、苦しみが和らぎ、希望をつないで生きられる社

会の実現に向け、微力ながら全力を尽くしてまいります。

会員の皆さまとともに考え、ともに学び、ともに歩んでいけますことを心より願っております。今後ともご指導、ご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

## 理事就任のご挨拶



国際医療福祉大学成田病院  
看護部

關本 翠子

この度、日本緩和医療学会の理事を拝命いたしました国際医療福祉大学成田病院の關本翠子（せきもとあすこ）です。代議員および理事選挙に際しましては、多くの会員の皆様から温かいご支援を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。

前期は、会則検討委員会委員長をはじめ、総務・財務委員会、健康保険・介護保険委員会の委員として学会運営に携わってまいりました。

私は2026年4月より国際医療福祉大学成田病院に勤務しております。37診療科を有する高度急性期病院において、がん・非がんを問わず、患者さんの治療とケア、その後の生活や社会的課題に対応できるチーム医療の推進と看護師の育成に取り組んでおります。

これまで18年間国立がん研究センター中央病院でがん患者・家族への看護に従事した後、2006年より国立がん研究センター東病院に勤務し、7年間緩和ケア病棟看護師長として地域における家族ケアや疼痛緩和に関する教育、症例検討会などを行ってまいりました。また、看護師のコミュニケーション研修「NURSE」を様々な地域へと展開し、多くの緩和医療に携わる皆様とのご縁をいただきました。さらに、2013年には認定看護師教育課程の立ち上げに携わり、多くの緩和ケア認定看護師の育成に努めてまいりました。

その後、再び国立がん研究センター中央病院に戻ってからは、看護管理者として、病院経営の視点からの提言、看護の質の可視化、支持療法・緩和ケア教育の推進、臨床倫理委員会での活動などに取り組んでおります。診断時から標準治療、臨床試験に至るまで、患者さんとともに創り上げる緩和ケアの実践を大切に、院内外の看護師教育や多職種連携、

さらには診療報酬を含めた制度への提言にも積極的に取り組んでまいりました。

今年度は安全・感染委員会委員長を拝命いたしました。医療安全や感染対策に加え、インシデントに関わる医療者への心理的支援、患者・家族が抱える倫理的課題、ハラスメント対策、AIとの適切な共生など、医療現場を取り巻く様々な課題について、代議員ならびに会員の皆様のご意見を伺いながら委員会活動を進めてまいります。

緩和医療は、職種や施設、地域を越えた協働によって発展してきた学問・実践領域です。臨床の第一線と看護管理の両方の経験を生かし、会員の皆様が直面する課題の解決や、緩和ケアを担う医療職の育成、そして患者さん・ご家族によりよい緩和ケアが届けられる環境づくりに貢献してまいりたいと考えております。

微力ではございますが、看護師を代表する理事の一人として、本学会のさらなる発展のため尽力してまいります。今後ともご指導、ご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

## 理事就任のご挨拶

慶應義塾大学病院  
緩和ケアセンター  
竹内 麻理

このたび、会員の皆さまのご支援により、引き続き理事を務めさせていただくこととなりました。改めて心より感謝申し上げます。

本学会の諸先輩方のご尽力により、緩和ケアはわが国に広く普及しつつあります。しかし、その恩恵が十分に届いていない患者さんやご家族が今なお少なくありません。がん患者さんのみならず、さまざまな疾患や療養の場において緩和ケアを必要とする方々に、適切な支援を届けていくことが今後ますます重要になると考えております。

私は、誰もが必要なときに希望する場所で適切な緩和ケアを受けることができ、また誰もが適切な緩和ケアを提供できる社会の実現を目指し、学会活動に取り組んでまいります。そのためには、未来の緩和医療を担う人材の育成が不可欠です。緩和ケアを専門とする医療従事者は依然として不足しており、特に私の専門とするサイコオンコロジーの領域では、患者さんやご家族の心理・精神的支援に対するニーズが高い一方で、十分な支援体制が整っているとは言えません。学会活動を通じて、多職種が学び成長できる環境づくりを進め、次世代の育成に力を注いでまいりたいと考えております。

今期も利益相反委員会委員長を拝命いたしました。利益相反管理は学術活動の信頼性を支える重要な基盤であり、透明性と公正性の確保に努めてまいります。また、新たに財務・総務委員会副委員長を務めることとなりました。学会を取り巻く環境が変化中、健全で持続可能な学会運営を支え、会員の皆さまにとって価値ある学会活動の推進に尽力してまいります。

理事二期目という責任の重さに身の引き締まる思いですが、会員の皆さまとともに、誰もが必要な緩和ケアを受けることができ、誰もが適切な緩和ケアを提供できる社会の実現に向けて力を尽くしてまいります。今後ともご指導、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

## 理事就任のご挨拶



東海大学医学部  
緩和医療学  
徳原 真

このたび、日本緩和医療学会の理事を拝命いたしました、徳原真と申します。今期、初めて理事の任を担うこととなり、その責任の重さを改めて感じてお

ります。

私はもともと外科医として診療にあたっていました。手術の現場で患者さんと向き合うなかで、病を治すことだけでなく、苦痛をやわらげ、その人らしい時間を支えることの大切さに気づき、緩和ケアの道へと歩みを進めてまいりました。

近年、高齢化の進行や、地域による医療資源の格差など、社会が抱えるさまざまな課題が、緩和ケアの現場にも少なからず影響を及ぼしていると感じております。その一方で、生成 AI をはじめとするテクノロジーの進歩は目覚ましく、私たちの暮らしや医療のあり方そのものを大きく変えつつあります。変化の速い時代だからこそ、「いま、何が問題なのか」という問題意識を常に持ち、ひとつひとつ丁寧に向き合っていきたいと考えております。

このたびは、健康保険・介護保険委員会の委員長、ならびに地区委員会の副委員長を拝命いたしました。いずれも、緩和ケアを必要とする方々へ、制度の面からも、地域の面からも、よりよい医療を届けるために欠かせない役割であると受け止めております。微力ではございますが、できる限り力を尽くしてまいります。

私一人にできることは限られております。だからこそ、会員の皆様お一人お一人の声に耳を傾け、現場の実感を大切にしながら、学会の活動に活かしてまいりたいと願っております。

至らぬ点も多いかと存じますが、皆様のご協力とご指導を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。どうぞよろしくお願いいたします。

## 理事就任のご挨拶



北里大学大学院  
看護学研究科  
がん看護専門看護師  
林 糸り子

このたび、理事に選出いただきました北里大学のがん看護専門看護師 林あり子と申します。引き続き理事を務めさせていただけることに感謝しております。ご支援くださる多くの皆様への感謝を胸に、本学会の発展と緩和ケアの普及に微力ながら尽力してまいります。

私は2012年より代議員、2020年より理事として活動し、教育・研修事業、広報委員会、各種ガイドライン作成、緩和ケアチーム研修会、ELNEC-J コアカリキュラムなどを通して、緩和ケアの質の向上と普及に取り組んでまいりました。特に緩和ケア基礎セミナーでは、多職種の皆様に学んでいただける教育プログラムの充実を目指し、多くの関係者のご支援のもと運営しております。この場をお借りして、ご協力いただいております皆様に心より感謝申し上げます。

今期は、ニューズレター編集委員長、広報委員会、ならびに緩和ケア基礎セミナー部会長を務めさせていただきます。デジタル化やAIが急速に進展する中、ニューズレターの新たな役割や情報発信のあり方についても検討し、本学会の活動や最新の情報をより分かりやすくお届けできるよう努めてまいります。また、緩和ケア基礎セミナーを通じて、多くの医療従事者に本学会の活動を知っていただき、一人でも多くの方に学会員としてご参加いただけるよう取り組んでまいります。

さらに、医療従事者不足が課題となる中、学会が会員の皆様の学びやキャリア形成を支え、互いに支え合える場となるような取り組みについても検討していきたいと考えております。

多職種が連携しながら緩和ケアの実践・教育・研究を推進し、その成果を広く社会へ発信することで、国民の皆様へ質の高い緩和ケアが届くよう努めてまいります。本学会がより多くの方々にとって学びと交流の場となり、緩和ケアのさらなる普及・発展につながるよう尽力してまいります。

今後とも、ご指導、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

## もっと知ってもらう広報を



永寿総合病院  
がん診療支援・緩和ケアセンター  
廣橋 猛

この度、3期目の理事を拝命いたしました。いつもご支援いただいている皆様、本当にありがとうございます。今期も引き続き、広報委員会委員長を務めさせていただきます。

前回、私はこう書きました。「今後の緩和ケアの発展を考えたとき、広報こそが一番大切である」と。この思いは、少しも変わっていません。

会員の皆様は、それぞれの施設で、それぞれの地域で、本当に素晴らしい活動をされています。学会もまた、数多くのセミナーや学術大会を重ねてきました。けれども、どれだけ価値ある活動も、知ってもらえなければ、そこで止まってしまう。知ってもらってこそ、その価値は何倍にも広がっていく。だからこそ、皆の活動を多くの人に届けること。これが私たちの広報の、変わらぬ柱です。

今期は、3つの取り組みを前に進めます。

1つ目は、一般市民向けホームページの開設と充実です。緩和ケアを必要とする患者さんやご家族が、迷わず必要な情報にたどり着ける。そんなサイトを目指します。

2つ目は、学会を身近に感じてもらう工夫です。マスコットキャラクターなどの検討を進めています。「緩和医療学会って、なんだか親しみやすいね」。そう思ってもらえる入り口をつくりたいのです。

3つ目は、学術大会の情報発信です。年次大会はもちろん、各地で開かれる支部学術大会にも、ぜひ目を向けてください。支部大会は、その地域の医療者が顔を合わせ、つながりを深める貴重な場です。身近な学びの機会を、もっと多くの方に知ってもらい、参加の輪を広げていきます。

広報は、一人ではできません。皆様の力が必要です。「こんな活動を知ってほしい」「こう伝えたらどうか」。そんな声を、ぜひお聞かせください。本会が他学会に先んじて取り組むSNS発信にも、引き続きご注目いただければ幸いです。

緩和ケアを必要とするすべての人へ。そして、それを支えるすべての仲間へ。届けるべきものを、しっかりと届ける。その役割を、全力で果たしてまいります。

## 仲間とともに創る緩和医療の未来



国立がん研究センター中央病院  
精神腫瘍科  
松岡 弘道

今回、理事に再選いただきました国立がん研究センター中央病院の松岡弘道と申します。私は心療内科医として約25年に

わたり、サイコオンコロジー、緩和医療、腫瘍内科を含むがん診療に携わってまいりました。現在は支持・緩和医療開発部門／精神腫瘍科に所属し、精神腫瘍科外来、家族・遺族ケア外来、緩和ケアチームなどを担当するとともに、支持療法・緩和治療・心のケアの研究支援組織であるJ-SUPPORT(<https://www.j-support.org/>)の代表を務めています。また、遺族ケアガイドライン委員長として、家族および遺族ケアの充実にも取り組んでいます。

前回の理事任期中は学術委員長を務め、委員の公募などを通じて、多様な会員の皆様が学会活動に参加できる体制づくりに取り組んでまいりました。

私たちは日々の臨床の中で多くの知恵や工夫を生み出しています。それらを研究によって検証し、エビデンスとして社会に還元することが、緩和医療という学問の発展につながると考えています。

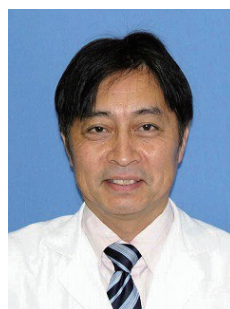
また、世界最大規模の緩和医療研究ネットワークであるPaCCSCへの留学を通じて、質の高い研究の基盤は「人と人とのつながり」であることを強く実感しました。医師、看護師、薬剤師、心理療法士、理学療法士、作業療法士、管理栄養士、医療ソーシャルワーカーなど、多職種が互いを知り、信頼し合い、「この仲間たちと一緒に研究をしたい」と思える関係性こそが、新たなエビデンスを生み出す原動力になると考えています。

会員同士がつながり、日々の臨床で生まれる疑問を仲間とともに解決していける環境を全国に広げたいと思います。そのためにも、J-SUPPORTの活動をより多くの学会員の皆様に知っていただき、「ALL JAPAN」の体制で研究成果をガイドラインや国際発信につなげていきたいと考えています。また、若手研究者や萌芽的研究の支援にも積極的に取り組んでまいります。

学会は役員だけがつくるものではなく、会員一人ひとりがつくり上げるものです。多職種がつながり、学び合い、新たな研究や実践が生まれる場として本

学会をさらに発展させていきたいと考えています。そして、「この仲間たちと一緒に活動したい」と思える関係性を育みながら、会員の皆様との対話を大切にし、開かれた学会運営に努めてまいります。皆様とともに学会の未来を創る2年間にしたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 理事就任のご挨拶



獨協医科大学  
医学部 麻酔科学講座  
山口 重樹

日本緩和医療学会の理事を拝命いたしました獨協医科大学医学部麻酔科学講座の山口重樹です。引き続き、理事として本学会の発展に寄与していく所存です。

この場をお借りして、理事選挙においてご支援を賜りました多くの代議員、そして、会員の方々に心より感謝申し上げます。

私の臨床、研究、教育のバックグラウンドは痛みの診療です。柔道整復師の家系で生まれ、祖父、父、叔父達が痛みに苦しむ患者へ寄り添い、手当をする姿を見てきました。そのことが、医師を目指す志に、そして、痛みの診療に研鑽を積んできた理由です。また、私の誕生日である「10月20日」は「トオ・ツー・ゼロ」という語呂合わせの日であり、痛みの診療医となったことは私にとっての天命であると信じています。この日に出産してくれた今は亡き母に感謝しています。

1992年獨協医科大学医学部を卒業し、これまで30年以上、麻酔科医、ペインクリニック医、緩和ケア医として、痛みの診療、研究、教育に情熱を注いできました。痛みの診療については、獨協医科大学病院麻酔部（ペインクリニック）および緩和ケア部門、痛みセンターにおいて、がん、非がんを問わず、多くの患者さんから多くのことを学ばせていただきました。研究については米国のThe Johns Hopkins大学での留学を中心に臨床、基礎と幅広い分野に従事し、今尚その研究心の情熱は冷めていません。教育については獨協医科大学で幅広い学生に「望まれている医療とケアは何か、望まれる医療人とは何か、良医とは何か」などについて緩和医療学を通して指導し、学生と共に考え続けています。

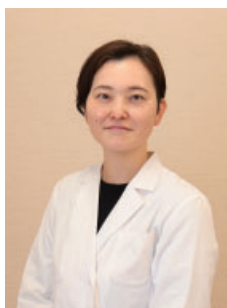
また、日本麻酔科学会、日本ペインクリニック学

会、日本緩和医療学会などの学術学会においては理事、代議員（社員、評議員）、各種委員として活動、現在は一般社団法人日本ペインクリニック学会の代表理事を務めるなどして、今まで以上に、痛みの診療の臨床、教育、研究、啓発活動にも力を入れています。さらには、国際疼痛学会などの国際学会の各種委員としての活動、痛みに関する国際的な学術誌の編集員、海外医療ボランティアへの参加などの活動を通じて、多くの経験を積み、広い視野を育み続けています。

これらの30年を超える医療者としての経験を日本の緩和医療の発展に活かすべく、再度理事選に立候補、就任させていただきました。皆さんの期待を裏切らないよう、今後も理事として、「本邦の緩和医療の臨床の質の向上」、「世界に負けない研究活動の促進」、「国民の緩和医療に対する意識の向上のための教育活動」、「痛み診療の均てん化」などを充実できるよう尽力していきたいと考えています。

今後とも日本緩和医療学会の発展はもとより、学会の代表の一人として日本の医療の発展に貢献できるように精進していく所存です。何卒、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

## 理事就任のご挨拶



洛和会音羽病院  
緩和ケア内科  
山代 亜紀子

このたび、2期目の理事を拝命いたしました、洛和会音羽病院緩和ケア内科の山代亜紀子と申します。前期に引き続き温かいご支援を賜りましたこと、心

より感謝申し上げます。

前期は委託事業委員会・教育研修委員会に所属し、PEACEプロジェクトを中心とした基本的緩和ケア領域、専門的緩和ケア領域の医療者への教育の推進に携わってまいりました。委託事業委員会のPEACEプロジェクトとオレンジバレーンプロジェクトは、来年でちょうど20周年という大きな節目を迎えます。これまで多くの先生方の尽力により、基本的緩和ケアの考え方は全国の医療現場に着実に浸透してきました。その一方で、地域による偏在、マンパワー不足、専門的緩和ケアへのアクセスの格差など、私たちの手がまだ十分に届いていない部分も少なくないと実感しております。

2期目となる今期も、引き続き基本的緩和ケア教育の充実と提供体制の整備、専門的緩和ケアを担う多職種の次世代育成とキャリア支援に、取り組んでまいりたいと考えております。あわせて、今期は新たに会則検討委員会も拝命いたしました。学会のあゆみとともに実情にそぐわなくなった規定の見直しや、DX推進など新部門の設立にも対応し、皆様が活動しやすい体制づくりに、臨床現場に近い視点から貢献できればと思っております。

これまでの先生方の歩みを土台としながらも、時代や次世代の感覚に合わせたアップデートが必要だと感じています。私自身の「地域の先まで緩和ケアを」という理念のもと、まだ道半ばではありますが、一歩ずつでも前進できるよう、皆様とともに取り組んでまいり所存です。

若輩で至らない点多々あるかと存じますが、引き続きご支援とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

## よもやま話



### 顔の見える関係こそ地域の財産

#### —大空町における多職種連携と後方支援病院との絆

大空町東藻琴診療所 所長 山木 悠太

皆様、初めまして。北海道大空町東藻琴（ひがしもこと）診療所で在宅療養支援診療所の所長を務める山木と申します。今回は、病診連携を行っている北見赤十字病院緩和ケア病棟師長の部川さんとのご縁で寄稿させていただきます。貴重な機会をいただき感謝申し上げます。

私は学生時代に出会った地域医療の魅力が忘れられず、心臓外科から転身して地域医療に戻ってまいりました。医師 18 年目です。大空町は人口約 6,200 人、面積は東京 23 区の半分ほどですが、常勤医は 2 人しかいません。私は九州や四国での外科医時代も含め、僻地や離島で訪問診療や自宅看取りに多く関わってきました。

しかし、北海道に戻ると在宅医療の文化の違いに驚きました。当時の大空町には自宅での緩和医療が皆無だったのです。医療側がニーズを把握しておらず、連携体制もありませんでした。赴任前の診療所は医師の交代が頻繁で住民の信頼は失墜しており、日中の救急に対応せず、老衰やがん末期もすべて中核病院へ搬送されていました。地元で最期まで看る環境がなかったのです。そこで私が最初に行った取り組みは、『患者さんを断らずにすべて診る』ことでした。

赴任 2 年目、まさに『0 から 1』となる日が突然やってきました。『夫が末期の胃がんで余命 1 ヶ月と言われた。家で最期まで看たいので往診に来てほしい』とのご相談に、私は可能だと即答しました。しかし、スタッフには大変驚かれました。東藻琴で在宅看取りなど行ったことがないからです。『夜はどうするのか』『誰が連絡を受けるのか』、まずはそこからのスタートでした。

大空町には当時も今も訪問看護ステーションがありません。隣接する網走市や美幌町から来てもらうため到着までに 30 分以上かかります。それならば『すべて自分で行えばよい』と考え、日中は定期の訪問看護を利用し、夜間のファーストコールはすべて私自身で受けることにしました。

この看取りは大きな転換点となりました。当時は ICT による情報共有もオンライン会議もありませんでしたが、多職種で症例を振り返り、大空町初の連携体制を築くことができました。これを機に ICT 活用が一気に進み、のちにご家族が住民向けに体験談を話してくださったこともあり、徐々に『最期は東藻琴の先生が看てくれる』と地域に認知されるようになりました。

こうした在宅医療は、バックベツドを確保し緊急事態に備えてくださる後方支援病院があるからこそできることです。部川さん、いつも本当にありがとうございます。何かあればすぐにコンタクトが取れる『顔の見える関係』こそが大空町の財産です。最後になりますが、私たちはまだまだ発展途上です。皆様、今後ともご指導を賜りますようお願い申し上げます。

## 1. Palliative Care Research 編集委員会

Palliative Care Research 編集委員会  
委員長 佐藤 一樹

2025 年の査読功労者につきまして、委員の協議と厳正なる審査の結果、以下 11 名を受賞者と決定しました。

- 1 位 荒川 さやか先生  
国立がん研究センター中央病院
- 入賞 石井 容子先生  
国際医療福祉大学
- 入賞 大屋 清文先生  
ピースホームケアクリニック京都
- 入賞 大屋 里奈先生  
京都府立医科大学
- 入賞 小田切 拓也先生  
西濃厚生病院
- 入賞 川崎 優子先生  
兵庫県立大学
- 入賞 川島 有沙先生  
名古屋大学医学系研究科
- 入賞 清水 陽一先生  
国立看護大学校
- 入賞 原 伸輔先生  
大阪大学医学部附属病院
- 入賞 升川 研人先生  
東北大学大学院医学系研究科
- 入賞 吉田 詩織先生  
東北大学大学院医学系研究科

2026 年度の日本緩和医療学会総会において、査読功労賞の表彰式を行いました。

## 2. 開催案内 (第 7 回東北支部学術大会)

第 7 回東北支部学術大会  
大会長 鴻巣 正史

このたび、日本緩和医療学会 第 7 回 東北支部学術大会を、2026 年 10 月 17 日（土）、岩手県盛岡市のキオクシアアイーナ（いわて県民情報交流センター）において開催いたします。

本学術大会のテーマは、「いのちの声に耳を澄ませて」といたしました。

私たちが緩和医療に携わる原点には、苦しみの中にある人の声に静かに耳を傾け、その人らしさと尊厳を大切に支えるという思いがあります。病の経過や治療の限界、そして死を見つめる時間の中で、患者さんやご家族は言葉にならないさまざまな思いを抱えながら日々を過ごされています。その沈黙やまなごしの奥にある「いのちの声」に、私たちはどれほど丁寧に向き合っているのでしょうか。

今回のテーマには、患者さんやご家族の声だけでなく、地域で支え合う人々の声、そして医療者自身の心の声にも耳を傾けたいという願いを込めました。すぐに答えが見つからない問いと向き合うことも少なくありませんが、その静かな時間の中にこそ、次の実践へとつながる気づきがあるのではないかと考えています。

本学術大会では、医師・看護師・薬剤師・ソーシャルワーカー・リハビリテーション職・心理職・管理栄養士・ボランティアなど、多職種が垣根を越えて学び合い、それぞれの立場から「いのちの声」にどのように応えていくかを共に考える場にしたいと考えております。一般演題では日々の実践や研究成果を発表・共有していただくとともに、教育講演では腎不全患者に対する緩和ケア、特別講演・市民公開講座ではケアの本質である「癒し」をテーマとした講演を予定しております。さらに、スイーツセミナーなど、多彩なプログラムをご用意しております。

本学術大会が知識や技術の共有にとどまらず、互いの経験や思いを分かち合い、新たなつながりが生まれる機会となることを願っております。参加される皆さまにとって実りある学びの場となるとともに、心と心が静かに響き合う出会いの場となれば幸いです。東北の地から、緩和医療の理念と実践を未来へとつないでいく一歩となることを心より願って

おります。

10月の岩手・盛岡は、紅葉が街を美しく彩る季節です。情緒豊かな盛岡の地で、皆さまをお迎えできますことを、心より楽しみにしております。

### 3. 開催案内

#### (第8回東海・北陸支部学術大会)

第8回東海・北陸支部学術大会  
大会長 龍澤 泰彦

このたび、日本緩和医療学会 第8回 東海・北陸支部学術大会を2026年10月3日(土)に金沢市文化ホールにて開催させていただき運びとなりました。

本会のテーマは、「つなぐ ～時・場を問わず、次世代へと～」といたしました。癌治療の進歩に伴い、癌の治療期間も長くなり、また癌を経験しながらも社会生活を営んでおられる方も増えてきています。そのような中で、治療の時期を問わず、療養の場所を問わず、十分な支援が切れ目なく提供できることが求められています。また緩和医療に携わる医療従事者の育成も喫緊の課題であります。日頃現場で問題となっていること、および将来的な課題について、有意義なディスカッションができる大会となるよう鋭意準備を進めております。

特別講演では、北陸緩和医療研究会・臨床研究懇話会のアドバイザーも担っていただいている森田達也先生(聖隷三方原病院)に、「あのとき何が大事だったのだろう - 記憶に残るエピソードから見えてくる緩和ケアの本質」と題してご講演いただきます。また教育講演では、腎不全患者のための緩和ケアガイドライン作成にも携われ、北陸にもゆかりのある大武陽一先生(たけお内科クリニック からだと心の診療所)に「腎不全の緩和ケア」と題してご講演いただくこととなっています。お二方とも全国で引っ張りだこですが、今回金沢でじっくりとお話を拝聴できるいい機会になるものと思われま。

シンポジウム・ワークショップでは治療の連携、地域連携、多職種連携、患者・家族の思いをつなげる療養の場の連携、そして次世代への継承、といった大会テーマに沿ったセッションを準備しております。一般演題では口演とポスターの二本立てで、東海・北陸のそれぞれの地域での研究・事例の発表、活動報告をしていただきます。

会場の金沢市文化ホールはJR金沢駅から車で10

分、金沢の中心街に位置しています。兼六園・尾山神社などの観光地、繁華街も徒歩圏内です。当日は活発な意見交換や有意義な情報収集をしていただき、その後は参加者同士で交流を深めながら秋の金沢を十分に満喫していただければ幸いです。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

### 4. 開催案内

#### (第8回関西支部学術大会)

第8回関西支部学術大会  
大会長 上野 博司

この度、日本緩和医療学会第8回関西支部学術大会の大会長を拝命いたしました、パナソニック健康保険組合松下記念病院 緩和ケア内科の上野博司です。

本大会は2026年10月10日(土)、京都北山に位置する京都府立京都学・歴史館および稲盛記念会館にて開催いたします。

今大会のテーマは「関西発 多職種で紡ぐ緩和ケア」といたしました。

私はこれまで二期にわたり関西支部長を務めてまいりましたが、関西支部はエリアが比較的コンパクトで、会員同士が顔の見える関係を築きやすいという特徴があります。また、関西には緩和ケアに強い情熱を持つ医療者が多く、こうした結びつきと機動力を活かして、関西から全国へ緩和ケアを発信し、さらに盛り上げていきたいという思いがあります。

また、緩和ケアは、医師のみならず、看護師、薬剤師、リハビリテーションスタッフ、臨床心理士、医療ソーシャルワーカーなど、多職種の協働によって支えられる医療です。それぞれの専門性が重なり合い、患者さんとご家族を支えていく過程そのものが「紡ぐ」という営みであり、本テーマにはそのような思いを込めました。

私自身が長年京都府立医科大学に勤務していたことから、本大会の企画・運営は、京都府で緩和ケアを中心的に支えている多職種のメンバーが担当いたします。大会長企画として、緩和ケアにおける各職種の活動内容を他職種に向けて紹介するリレーセッションを実施いたします。さらに、講演、シンポジウム、パネルディスカッション、ワークショップでは、非がん性疾患(心不全・呼吸不全・腎不全)の緩和ケア、AI、コミュニティーサポート、統合医療、

---

ACP など、現在注目されているテーマを幅広く取り上げました。一般演題も 70 演題の登録をいただき、すべての職種の参加者にとって学びと交流の場となることを期待しております。

大会当日は三連休の初日にあたります。紅葉には少し早い時期ではありますが、暑さも和らぎ、京都観光には最適な季節です。関西支部の会員の皆様はもちろん、他支部の会員の方々のご参加も歓迎いたします。学生の方は参加費が無料となっておりますので、非会員の方もお誘い合わせのうえ、ぜひご参加ください。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

---

## 編 | 集 | 後 | 記

---

今号では、橋口さおり新理事長をはじめとする新たな理事の方々による就任挨拶を特集しました。非がん疾患への緩和ケアがさらに拡大していく時代のなかで、卒前教育と若手育成や多様な人材の登用など、様々な視点から今学会の新たな歩みが示されています。また「よもやま話」では、北海道大空町での「顔の見える関係」を礎とした地域連携の重要性や有難さが綴られました。今秋には各地域で支部学術大会が開催されます。デジタル化が進むなか、本ニューズレターが会員同士の繋がりを深め、質の高いケアを届ける一助となれば幸いです。今後も皆様の声を大切に、新しいニューズレター編集委員会での情報発信に努めてまいります。  
(吉武 淳)

小早川 誠  
坂本 岳志  
武村 尊生  
○橋口さおり  
部川 玲子  
細矢 美紀  
山口 重樹  
山田 圭輔  
吉武 淳